
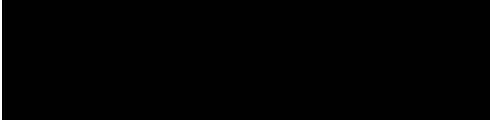


陳 情 一 覧 表

令和2年10月盛岡市議会臨時会（令和2年10月23日）

受理 番号	受理年月日	陳 情 の 要 旨	提 出 者
6	R2.10.7	新型コロナ用ワクチンの危険性と無効果についてご理解の共有と善処を陳情	
7	R2.10.20	石川啄木記念館改修に関する陳情	

令和2年10月5日

盛岡市 議会議長 遠藤政幸 様

(住所)
(氏名)
(M.P.)

新型コロナ用ワクチンの危険性と無効果について
ご理解の共有と善処を陳情

(要旨)

- 1 新型コロナ用ワクチンの危険性についてご説明いたします。その認識を共有し、対策等の善処をして頂きたく陳情します。
- 2 新型コロナ用ワクチンの無効果についてご説明いたします。その認識を共有し、対策等の善処をして頂きたく陳情します。

(理由)

- 1 新型コロナ用ワクチンは「遺伝子組み換えウイルス」を使用するものです。人の筋肉に注入後、どのような反応があって、いつまで続くのか不明です。安全性が確認されるまで、導入しないよう陳情いたします。
- 2 RNAウイルスである新型コロナウイルスは不安定で変異しやすいものです。ワクチンが開発され、接種されるまでの期間に、ウイルスはかなりの変異をしていますので、ワクチンの効果は全く無いか、ほとんど無いと考えられます。

上記についての詳細は別紙に記載してあります。

陳情第 6 号



謎が多い新型コロナワクチン

その危険性と効果について

Oct,3,2020 Sirasawa Lab

RNA新型コロナ発生を知っていたかのような

ファイザーのワクチン開発

新型コロナ症候群は、中国武漢で2019年12月頃より発生し、世界中に伝播しほぼ1年になろうとしています。世界的には未だ終息に至ったようには見えません。

一方で、新型コロナの予防ワクチン開発が進んでおり、来年から世界中に大量に供給される予定になっています。

これまでのワクチンは、主に病原体ウイルスを不活化したものを利用します。ところが、新型コロナ発生と同時に遺伝子工学を応用した新型ワクチンの開発が進められていたことが明らかになりました。アメリカのファイザー社の「mRNAワクチン」です。

2020年3月18日、2018年から研究開発してきたことが明らかになりました。ファイザー社のmRNAワクチンは本年内に何らかの薬事申請を出して承認されるだろうと予想されています。世界で初の承認ワクチンになります。なぜ、ファイザー社だけがわざわざRNAワクチンに限定して開発を始めたのでしょうか。

RNAウイルスは変異が速いため、感染が広がってから開発に入り、ワクチンが承認されるまでの間にはかなり変異していますから、効果あるワクチンを作るのはかなり困難です。ほとんどギャンブルに近い賭けの事業になります。メリットはライバルメーカー

が少ないぐらいでしょう。そんな危ない橋をゲイツ・ファイザー社はあえと渡ったのです。なぜでしょうか。

新型コロナが拡大してからは、イギリスのアストラゼネカ社が「ウイルスベクターワクチン」の開発に乗り出しました。日本政府は、ファイザー社とアストラゼネカ社の二社とそれぞれ1億2000万回分のワクチンを確保しました。また、武田薬品はアメリカのノババックス社の「組み換えたんぱく質ワクチン」を年間2億5千万回分を購入契約、第一三共は「mRNAワクチン」を開発中です。

いずれにしても、新型コロナワクチンは生ワクチンや不活化ワクチンではなく、遺伝子工学を応用した"新型ワクチン"として開発されています。しかも、いつの間にか新型コロナワクチンは総て遺伝子工学によるワクチンが有望とマスコミが根拠なく伝えるようになりました。ワクチンメーカーにとっては実に好都合な舞台が整いられたわけです。

■「Pfizer社、BioNTech社とワクチン共同開発へ」2020/03/18, jp.techcrunch

<https://jp.techcrunch.com/2020/03/18/2020-03-17-pfizer-and-biontech-announce-joint-development-of-a-potential-covid-19-vaccine/>

ファイザー社のサクセスストーリーとゲイツ氏の予言

RNAウイルスの新型コロナが発生する1年以上前から、ファイザー社はRNAワクチンの開発を行っていたことにはなりますが、下記のタイムラインを見ればとても偶然とは思えないストーリーがそこから浮かび上がります。ファイザー社にとって、まるで誰かが描いたシナリオ通りに事が運ばれているようなストーリーが流れています。

★2017年 ファイザー社に投資しているゲイツ財団のビルゲイツ氏が、「トランプは、パンデミックの対処に追われる」と予言。

★2018年 ファイザー社がmRNAワクチン開発に乗り出し、ドイツBioNTech社と提携。

★2019年 PCR検査を発明しノーベル化学賞受賞したキャリーマリス博士が肺炎で死亡。博士は「感染症診断にPCR検査を使ってはならない」と語っていた。

★2019年9月 「EVENT201」でビルゲイツ氏が「次に起きるパンデミックはコロナウイルスで起きる」と再び予言。

★2019年11月～12月 中国武漢で原因不明の肺炎患者が発生、感染が拡大していく。

★2020年1月 いわゆる中国論文が「NATURE」に掲載。調査チームは、病原体診断を通常は行わない「PCR検査」で実施、細切れの遺伝子を1本につなぎ合わせ「新型コロナウイルスの全ゲノム」として論文発表した。新型コロナはRNAウイルスだとした。

★2020年1月 WHOが中国論文を検証せずに追認し、COVID-19による緊急事態PHEICを宣言。

★2020年3月 アメリカのファイザー社が、開発中のmRNAワクチンが早ければ4月から臨床試験を開始すると発表。

上記の時系列から何を観て取るかによって、新型コロナウイルスとRNAワクチンへの見方が違ってきます。いずれ、現在の世界の大きな動きの方向のひとつが「ワクチン開発と接種」になっています。

SARSワクチンさえ出来ないのに

「新型コロナは年内にできる」と言ったのは何故か

新型コロナワクチンを、危険性も有効性も不明な新しい手法で作ろうとしているのは何故でしょう。SARSやMARSの有効なワクチンが未だに完成していないにもかかわらずにです。ましてSARSに似たウイルスであるなら、なおさらそのワクチンが短時間でできると何故言えるのでしょうか。SARSのような恐ろしい感染症が本当に現れたならば「半年ぐらいでワクチンができそうだ」などと無責任なことを言えるわけがありません。

ところがファイザーなどのメーカーは既に多額の手付金を受領しています。未知のウイルスに対して、新技術で作るワクチンが半年や一年で完成してしまうのです。すべてがワクチンメーカーに都合が良いように、かつ速やかに展開しています。何故でしょうか。

繰り返します。ワクチンメーカーは次のように言っているに等しいのです。

「SARSワクチンもMARSワクチンも完成していないが、SARS並みの恐ろしい新型コロナワクチンは新技術による遺伝子組み換え等のワクチンが有効だ。年内には供給できそうだ。」

この話のおかしさに気付かなくてはなりません。最初から、新型コロナはSARSとは違って季節性インフルと同レベルのものだとの認識があったか、または全く別の理由があって、新型ワクチンは短期間でできると言えたと疑わざるを得ません。

今、私たちはワクチンメーカーに疑念の目を向ける必要があります。一般市民は製薬メーカーの実験用モルモットではありませんし、メーカーの売り上げに寄与する義務も

ありません。せめて、ワクチンの安全性と有効性が確認されるまで使用しない、と強く決意しなくてはなりません。

開発中のワクチンの中で有望視されているのは、アストラゼネカ社の「ウイルスベクターワクチン」です。これも新型コロナウイルスそのものは利用しません。アデノウイルスやレトロウイルスなどベクター(運ぶ)役をさせるウイルス体内にあるゲノムの一部に、新型コロナウイルスの遺伝子を組み換えた人工的なウイルスを使用します。自然界には存在しない"遺伝子組み換えウイルス"です。それを人間の腕の筋肉に注入し、抗体を作らせようというわけです。ウイルスベクター自体の増殖はできないよう、ゲノムの一部を欠損しておきます。レトロウイルスやアデノウイルスは遺伝子治療に利用されており、そのバイオテクノロジーを今回のワクチン開発に応用しようというのです。

"遺伝子組み換えウイルス"をワクチンとして人間の体内に直接注入し、新型コロナウイルスのスパイク部分の特徴的な一部を増殖させ、宿主の免疫機構に抗体を大量に作らせるのが狙いです。

しかし、「遺伝子組み換えの食品」は、健康への懸念が指摘され続けています。遺伝子組み換え食品が危険ならば、遺伝子組み換えウイルスは食品以上に危険かもしれないと考えるのが市民感覚ではないでしょうか。

にも拘らず、この遺伝子組み換えワクチンについて、なぜかマスコミでは待望論が先行し、危険性についての懸念の声はほとんど上がりません。感染拡大に注意が向いているためかもしれませんが、コロナ感染以上の危険性があることを総ての人が認識する必要があります。

mRNAワクチンは、ウイルスのスパイク部分の抗原たんぱく質の一部又は全てのRNA 遺伝子情報を細胞内に送り、抗原たんぱく質を作らせ免疫反応を誘導します。注入後、

生体内で分解されないよう脂質ナノ粒子（LNP）に封入されます。端的に言えば、体内細胞の中で病原体の一部を作らせ抗体反応を促すものです。

しかし、人間の体内には多種多様の常在ウイルスが共生していて、生体の維持などに参与している可能性があります。ほとんど研究されていないためわからないのです。病原体にだけ免疫が働き、常在ウイルスに影響が及ばないという保証はありません。

世界中にさまざまな新型コロナが
広がっているのは何故か

ワクチンに使用する新型コロナウイルスの遺伝子配列は、中国武漢の肺炎患者の肺からPCR検査によって検出された、SARSに似たコロナウイルスのゲノムに基づいています。

「SARSに似たRNAコロナウイルス遺伝子が見つかった」として、これが肺炎の病原体だろうという"推定"で中国論文が書き上げられ、科学雑誌「NATURE」を通じ世界に向けて公表されました。これをWHOが間違い無いものとして認め、世界に向けて非常事態宣言を出したという経緯があります。

武漢の研究チームは、「患者の肺の洗浄液からSARSに似たコロナ遺伝子配列の一部が見つかった。この遺伝子を持つウイルスが病原体だろう」として周辺の遺伝子を拾い集め、パソコンソフトでウイルス全体のゲノムを決定しました。つまり、最初に電子顕微鏡でウイルスを見たわけではなく、多種類の遺伝子配列のプライマーでPCRで検出を繰り返して、多数の細切れ状態の遺伝子群をパッチワークして一本のRNAとしてつなぎ合わせたのです。そのゲノム配列は公表されましたが、そのゲノムを持つウイルスの全体

像の写真はありません。またそのゲノムのウイルスが実際に存在しているのかも確認していないのは明らかなのです。なぜ、最初に肺洗浄液から生きて大量にあるはずの病原体を電子顕微鏡で確認せず、わざわざ手間と時間のかかるPCR検査をしたのでしょうか。その説明は記されてはいません。

いずれ、武漢で発生した原因不明のウイルスは、調査チームが調べた時点でも病原体として同定されていなかったのです。そこは調査チームも「コッホの原則は満たしていません」と記していて、病原体が同定されていないことを明らかにしています。

にも拘らず、何故かWHOは新しい感染症が発生したことを認め、発表してしまいました。論文の検証もせず、たった一つのしかも中途半端な論文であるにも関わらず、直ちに追認してしまったのです。何故でしょう。私達はWHOに対しても疑念の目を向けなくてはなりません。

世界のワクチンメーカーも、武漢ウイルスのゲノムに基づいてワクチンを開発しています。しかし、世界各地で流行しているのは、中国論文に書かれているウイルスでない可能性さえあります。PCRで検出の手掛かりにする遺伝子配列は、各国共通では無いからです。

例えば、日本では新型ウイルスの耳を手掛かりにしているとすれば、アメリカでは鼻、イギリスでは眉、フランスでは口というようにバラバラな所を見えています。ですから、各国それぞれが検出した新型コロナウイルスが同じウイルスとは限らないのです。実際、各国が公表した新型コロナウイルスの電子顕微鏡写真は同じものとは言えないほどバラバラなのはそのためです。病原体が多様なら有効な抗体もそれに応じて多様化しなければ効果はありません。2つや3つならばまだ対応できるかもしれませんが、それ以上になれば対応は困難です。

RNAウイルスは変異しやすいため、
抗体ができて効果はありません

さらに、新型コロナはRNAウイルスです。一本鎖のRNAウイルスは、不安定で遺伝子の組み合わせが変異しやすい特徴があります。DNAウイルスのようにミスコピーを修復するという機能が無いからです。このため、ウイルスは増殖を繰り返すごとに少しずつ「変異ウイルス」も増やしていきます。「同義置換」と「非同義置換」がそれを意味します。

当然、日本の感染研も承知しています。時間の経過によってミスコピーの割合が違ってくるため、検査マニュアルで指導しているはずですが、公表していません。3月19日付け時点のレファレンスでは、5%以内としているのみです。つまり「95%以上同じであれば陽性にする」としていました。それから半年以上経過していますので、その値はかなり大きくなっているか、既にピークを過ぎているかもしれません。調べているのかいないのかも不明です。公表せずに内々で指導している可能性はあります。

いずれ、ミスコピーの割合が大きくなれば、高感度のPCR検査では陰性率も大きくなります。新型コロナを検出してはいるが、変異しているために陰性ということになります。この点も、PCR検査が病原体検査に不適切だと指摘される理由の一つです。

ですから、最初の武漢ウイルスが仮に毒性が強くても、数ヶ月後には毒性が弱まるなど、特性が次第に変わっていきます。逆に、毒性が強まるということはありません。

世界で開発中の新型コロナ用ワクチンは、1年以上経過した頃にはさらに変異しているでしょうから、仮に腕に打ったとしてもその効果は全く無いか、ほぼ無いと言わざるを得ません。逆に危険性しかありません。

また、世界中に新型コロナが本当に蔓延しているなら、既に多くの人には自然免疫及び集団免疫が広がっていることとなります。多くの人が生ワクチンを打ったに等しい効果を得ていることとなります。ならば、当面の間は新たにワクチンは打つ必要は全くありません。

新型コロナウイルスで陽性になるのではなく、

常在コロナウイルスで陽性になっている場合もあります

季節性インフルエンザも新型コロナと同じコロナウイルスです。さらに、すべての人にはコロナウイルスと同類で多数の「常在コロナウイルス」が共生しています。身体が冷えていわゆる風邪をひく症状になる場合、一部の常在コロナウイルスが活性化されるからだと言われます。この常在コロナウイルスが、PCR検査に引っ掛かって陽性になることも少なくないと推測されます。

PCR検査の正当性に疑問を抱いた科学者でもあるタンザニア大統領マグフリ氏は、PCR検査を逆検査し、その不適正ぶりを明らかにしています。もともとコロナウイルスは、多くの植物な動物に共生していますので、科学者でもあるマグフリ大統領はパパイヤなどのフルーツや、山羊や鳥の卵などをPCR検査にかけさせました。予想通り、多くが陽性になりました。PCRは、パパイヤに共生している常在コロナウイルスに反応した

と考えられます。パパイアにさえ反応する以上、多くの人間も新型コロナに感染していても陽性になる可能性があることとなります。

新型コロナの遺伝子約3万個の内、PCRで検出しようとしているのは約100個にもなりません。ウイルス全体の300分の1を手掛かりに当てようとしているだけです。前出の例のように、犯人の耳の形だけを手掛かりに街中にいる人を犯人か犯人でないかを決めているようなものです。局所的には高精度でも不確実なのがPCR検査です。コロナウイルスのインフルエンザウイルスが同類の新型コロナのPCR検査に引っ掛かったとしても何の不思議はありません。

また、日本では新型コロナによる肺炎死者数が1000人を越えています。しかし、例年の肺炎死者数は年間約10万人です。毎日平均250人以上が肺炎で亡くなります。つまり、新型コロナの肺炎死者は、普通の肺炎で亡くなろうとしている人の一部の人が、たまたまPCR検査で陽性になっただけの可能性があります。肺炎患者数が例年並みか減少の可能性があるのもそうした理由からだと考えられます。

以上のことから、今開発されようとしている新型コロナ用ワクチンは全く効果が無いものであり、むしろ人々の健康を害する可能性がある"遺伝子組み換えワクチン"などです。

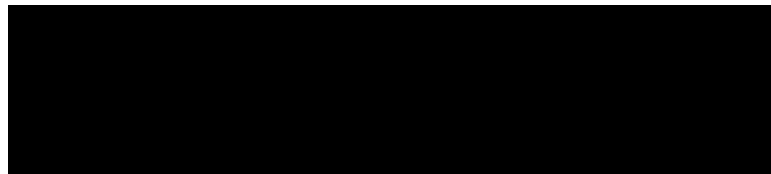
少なくとも、他国での実施状況を調べ、安全性と効果を数年に渡って検証した上でなければ新型ワクチンの導入はしないようお願いいたします。皆様の賢明な思慮と判断を重ねてお願いいたします。

執筆 白沢研究室

2020年10月20日(火)

盛岡市議会議員・遠藤政幸殿

石川啄木記念館改修に関する陳情



陳情の趣旨

現在進行中の石川啄木記念館改修について、将来性を担保できる改修として欲しい。

陳情の趣旨・理由

ニューコロナ・ウィルス (COVID-19) 等の影響のもとお忙しい毎日をお送りのことと存じます。

さて、石川啄木記念館は、本年四月十三日をもって、開館五十周年を迎えられたこと、御同慶の至りでございます。

御承知のように、石川啄木は、日本的・世界的存在です。

国内で言えば、教科書掲載の短歌作家のうち、啄木は常に最上位の作家です。

また、国際的に言えば、その短歌は、約20の外国語に翻訳されております。[具体的には、池田功(国際啄木学会会長、明治大学教授)編による、『世界は啄木短歌をどう受容したか』(桜出版、2019)を御覧戴けたらと存じます。]

この大切な石川啄木の顕彰についての盛岡市の奮闘については、敬意を抱いております。この石川啄木顕彰の中心の一つは、間違いなく石川啄木記念館だと存じます。

仄聞するところでは、記念館改修の計画が進んでおり、間もなく立案の最終的段階に入るところだと聞いております。また、その、概要は、盛岡市と玉山村との合併時の公約に基づき、玉山歴史民俗資料館とのセットで、記念館の将来を見据えた改修を行おうとしていると聞いております。

具体的には、敷地面積でいうと、2,000㎡であったものが、1,000㎡、経費的には17億4,900万円だったものが、8億円になっている段階だと聞いております。

万一、このままの案で進行致しますと、石川啄木記念館のみでなく、玉山歴史民俗資料館についても、将来性に課題を残すものになってしまうのではと、危惧しております。

(具体例を挙げれば、石川啄木記念館の中庭の消滅、玉山歴史民俗資料館の収蔵スペースなどは、多くの人の指摘するところだと存じます。)

「道の駅」との新設、連携も考えておられるようですが、その活用も含め、将来性を見据えた改修となりますよう、岩手県内外及び国際的賛同者共々のお願いを申し上げます。